



久昌寺と平知盛

1 久昌寺(きゅうしょうじ)

久昌寺は三重県伊勢市矢持町(やもちちょう) 菖蒲(しょうぶ)にある。矢持町は伊勢市の西南部にあり、鷲嶺(しゅうれい、参考①)などの山々に囲まれ、隣の横輪町とともに「一宇郷(いちうごう)」と呼ばれてきた。矢持町は横輪川沿いに下村(しもむら)、菖蒲(参考②)、上村(かみむら)、床(ノ)木(いすのき)の4地区から成る。



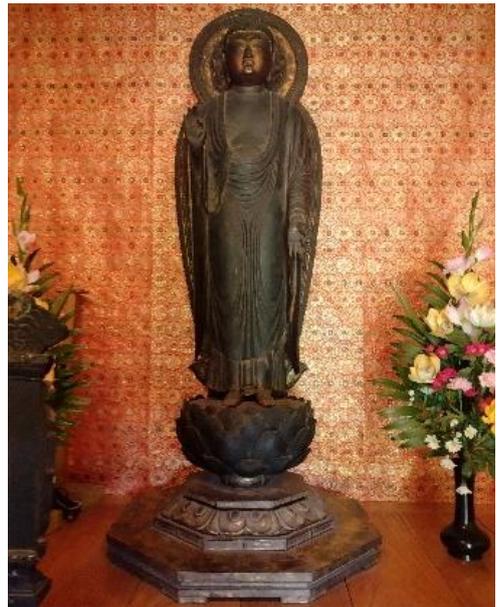
①久昌寺



②久昌寺前の解説案内板

寺伝によると、久昌寺は建久(けんきゅう)元年(1190年)に平知盛(たいらのとももり)によって創建された(久昌寺前の解説案内板、資料1)と伝えられているが確証はない。創建の1190年は壇ノ浦の戦いおよび平家滅亡の1185年から5年後である。久昌寺は創建時において、浄土宗(じょうどしゅう)であったと考えられる(久昌寺檀家総代の中瀬誠一氏による)。久昌寺の本尊は阿弥陀如来立像(あみだにょらいりゅうぞう)である。

平安時代(794年～1185年)の末期には戦乱などで治安が悪くなり、末法思想(まっぽうしそう、参考③)が流行し、僧侶・貴族階級だけでなく、武士や民衆の間にも「浄土信仰」・「阿弥陀信仰」(参考④)が盛んになった。阿弥陀如来は西方極楽浄土(さいほうごくらくじょうど)から迎えに来るとされている。「浄土信仰」によって、死後は西方極楽浄土に生まれたいと願い、極楽浄土に住むとされている阿弥陀仏に対する「阿弥陀信仰」が広がったことが、鎌倉時代(1185年～1333年)に法然(ほうねん)が開祖の浄土宗(参考⑤)、親鸞(しんらん)が開祖の浄土真宗の成立に繋がった。



③阿弥陀如来立像

久昌寺の山号(さんごう、参考⑥)は知盛山(ちせいざん)で、現在は曹洞宗(そうとうしゅう)に属している。現在、本堂の須弥壇(しゅみだん)には観音像(参考⑦)を安置している。



④久昌寺前の石碑



⑤本堂の内部



⑥山号の扁額(へんがく)「知盛山(ちせいざん)」

2 平 知盛(たいらのともり)

平知盛は平安時代末期の平家(へいけ)一門の武将である。平知盛(1152年～1185年)は清盛(きよもり)の四男で、母は平時子(たいらのときこ)である。官位は従二位・権中納言(ごんのちゅうなごん、参考⑧)であった。平知盛は「新中納言」と呼ばれた。

平家は源氏(げんじ)との壇ノ浦(だんのうら)の戦い(1185年)で敗れ、滅びた。平家物語では、知盛が鍾(おもり)として鎧(よろい)二領を着て、入水(じゅすい、水中に身を投げる)ことした死が劇的に描かれている(以下の(4)に詳しく記述)。これはさらに脚色されて、能・浄瑠璃(じょうるり)・歌舞伎(かぶき)では碇(いかり)を担(かつ)いで入水したとしている。歌舞伎では「碇知盛(いかりともり)」として有名である。

(1) 平清盛

平清盛は「治承(じしょう)3年(1179年)の政変」を起こして、後白河法皇の院政を停止して政治の実権を握った。しかし、これは反平家の勢力を生み出し、各地で反平家の反乱が起こった。平清盛は治承5年(1181年)に突然、病に倒れ、死去した。

(2) 一の谷の戦い: 源義経の活躍・逆(さかさ)落としと知章(ともあきら)の最期(さいご)

寿永(じゅえい)3年(1184年)2月7日、源氏との「一の谷の戦い」(現在の兵庫県神戸市)で、平知盛は大將軍として戦った。しかし、源義経(みなもとのおよつね)軍の「逆落とし(参考⑨)」で、敗北し、海上へ逃れた。この時、嫡男(ちやくなん、正妻が生んだ最初の男子)の知章は父を助けて討ち死にした(享年(きょうねん、死亡時の年齢)16)。その後、兄の平宗盛(たいらのむねもり、清盛の三男)の前で、知盛は知章の最期に対して、「…親を助けんと敵(かたき)に組むを見ながら、いかなる親なれば、子の討(う)たるを助けずして、かように逃(のが)れ参(ま)って…」とさめざめと泣いた(平家物語巻第九から引用、資料2)。

(3) 屋島(やしま)の戦い

平家は一の谷の戦いで敗れたが、屋島(現在の香川県高松市)を本拠とし、瀬戸内海を制圧していた。しかし、平家は寿永4年(1185年)2月19日、「屋島の戦い」で源氏に致命的な敗北を負った。

(4) 壇ノ浦の戦いと知盛の最期

寿永4年4月25日、源氏との長門(ながと)「壇ノ浦の戦い」(現在の山口県下関市)で、平家は敗れ、二位尼(にいのあま、母方祖母の平時子)は安徳(あんたく)天皇(満6歳4か月)を抱いて、入水した(参考⑩)。この際、三種の神器の一つである「草薙の剣(くさなぎのつるぎ)」は海中に失われた。

平家物語の巻第十一(資料3)は、平知盛の最期を次のように表現している。

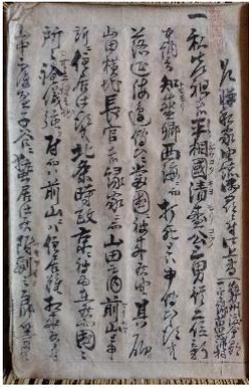
新中納言、「見るべき程の事は見つ。今は自害せん」(見届けねばならないこと(平家一門の人々の最期)はすべて見終った。今は自害しよう。)

乳母子(めのとこ、参考⑪)の伊賀平内左衛門家長(いがへいないざえもんいえなが、参考⑫)と共に、それぞれ鎧(よろい)二領を着て、手を取り組んで海へ入った(参考⑬)。これを見て、侍二十余人も後れないようにと、手に手を取り組んで、一所(一緒)に沈んだ。海上には平家の赤旗、赤印(あかじるし)が投げ捨てられ、かなぐり捨てられたので、竜田川の紅葉(もみじば)を嵐で吹き散らしたようであった。水際(みずぎわ)に寄せる白波も薄紅になってしまった。主人もいない空(むな)しい舟は、潮に引かれ、風に従って、どこに指すともなく揺られ行くのは、悲しいことであった。

平知盛、享年34。ここに、平家は滅亡した(1185年)。

(5) 矢持に残る知盛伝説

壇ノ浦の戦いで源氏に敗れた平知盛は自害したとされている。しかし、確かな証拠はなく、伝説(江戸時代の『中津家由緒書(ゆいしよがき)』(久昌寺所蔵・資料4・写真⑦および資料5と資料6・写真⑧)によると、平家の再興を願う知盛は従者30人とともに落ち延び、伊勢平氏の縁により、前山(まへやま)にしばらく隠れ住んだ。しかし、北条時政による探索が厳しくなったため、さらに前山から険しい鷲嶺(じゆりや)を越え、伊勢市矢持町(やもち)周辺に、再起を図るために隠れ住んだと伝えられている。久昌寺は平知盛の菩提(ぼだい)を弔(とむら)っている(参考⑭)。



⑦中津家由緒書



⑧(伝)知盛の墓(五輪塔、写真後方)

本堂の後には墓があり、平知盛と一族の墓(参考⑮)と伝えられている。平知盛が壇ノ浦の戦いで亡くなっておらず、伊勢の矢持の地に逃れてきたのが事実であれば、平知盛は壇ノ浦の戦い(1185年)から少なくとも5年以上生き延びて、菖蒲の地に久昌寺を創建したのであろうか？

(6) (久昌寺檀家総代)中瀬誠一氏の平知盛に対する思い

「一の谷の戦い」で平知盛は大將軍として戦った時、子(年齢16)の知章は、親の知盛を逃すために、自ら進んで敵に立ち向かい、討ち死にした。後に、兄の平宗盛に対して、本来ならば親がわが子の討たれるのを助けるべきところなのに、逆に子の知章に助けられ逃れたことを非情な親で恥ずかしいとさめざめと泣いた。

(以下、中瀬誠一氏談)

知章の最期を見て、親の平知盛はこの経験から、平家再興を成し遂げなければ、知章のためにも死ねないと思ったはずだ。「壇ノ浦の戦い」で源氏に敗れた平知盛は平家再興のために、自害する道を選ばず、また家来も死なすことができなかった。平知盛は家来を逃れさせ、各地に分散させた。知盛自らも従者と共に伊勢に逃れ、平家再興を図ったはずだ。(中瀬誠一氏は筆者に熱い思いを語った。)



中瀬誠一氏

久昌寺檀家総代
龍ヶ崎を守る会代表
平家の里語り部
宮川流域案内人

3 阿弥陀如来立像(あみだによりりゅうぞう)



⑨阿弥陀如来立像(上部)

本尊の「木造阿弥陀如来立像」は国の重要文化財に昭和31年6月28日に指定された。主なデータは以下の通り(三重県 文化財データベース・資料7による、括弧内は筆者が加えたもの)。

像の高さ97.3cm(資料8、9では97.1cm)、木造:檜(ひのき)、寄木造(よせぎづくり、写真⑩、参考⑯)、漆箔(しっぽく、漆(うるし)を塗り金箔を1枚1枚押す技法)。螺髪(らぼつ、仏像の丸くなっている一つ一つの毛)は彫りが小さく、髪際(はっさい、髪の生え際)は一文字となる。衲衣(のうえ、大衣(だいえ)ともいう)は通肩(つうけん、参考⑰)でその上に褌衫(へんさん/へんざん)を着し(注)、下半身に裙(くん、1枚の布を巻きスカートのように巻き付けて着る)を着す。上品下生(じょうぼんげしょう)の来迎印(らいごういん)(参考⑱)を結ぶ。面部(頭部)と共木(ともぎ、同じ木から成る)の胸板(頭部と胸部が一体となっている、分解された写真⑩参照)が埋め込み式になっている。

(注:後方からの写真⑲で、衲衣(大衣)の上に褌衫を着ているのが分かる。)

『三重県史』美術工芸(解説編)(資料9)で、次のように記載されている。

「本像は鎌倉時代の作であるが、穏やかな表情や正面の浅く整えられた衣文(えもん)等、平安時代末期の作風を示している。その一方で、胸部を頭部前面材と共木でつくる技法をはじめ、胸や腹に見られる豊かな張りや奥行きを感じられる体部側面、両袖(注)側面の写実的な強い調子の衣文線などに新しい感覚がうかがわれる。」(注:袖(そで)について:如来像には袖はないので、ここでは着物にあるような袋状の袖を意味するのではないと考えられる。)



⑩修理のため解体

(⑩～⑫の写真:久昌寺提供、写真⑩で頭部と胸板が一体になっているのがわかる)



⑪修理完成時(前面)



⑫修理完成時(後面)

仏像は近年(昭和30年(1955年))、美術院(参考⑨)によって解体修理(写真⑩～⑫、⑳)された。

眼は半眼(はんがん)または閉じているように見える。彫眼(ちょうがん、木を彫って表す)で、玉眼(ぎよくがん、水晶の板をはめ込んだもの)ではない。(注:資料9では玉眼となっている。)

眉間(みけん)に木製の白毫(びやくごう)がある。これはホクロではなく、白い毛が伸びて丸くなったものと云われている(水晶製の白毫をもつ仏像もある)。

頭頂部には肉髻(につけい)がある。肉髻は頭の上に髪を結っているのではなく、頭頂の肉が盛り上がったもので、悟りに達した証(あかし)と云われている。肉髻の正面の根元には木製(赤色)の肉髻珠(につけいしゅ)がある。肉髻珠は仏の知恵の光を表す珠と云われている。

垂れた耳朶(じだ、みみたぶ)には環状の穴があいている(写真⑮)。大きなピアスの跡であると云われている。

首に数本のしわが刻まれている(三道という、普通は3段のしわ)。三道は仏のふくよかさを表現している。

光背の頭光(ずこう)の最内部の円板に透かしがある。



⑬頭部(拡大):眼は半眼または閉眼で、彫眼。眉間に木製の白毫。頭は螺髪で髪際(はっさい、髪の生え際)は一文字(いちもんじ)。頭頂部に肉髻が盛り上がる。肉髻の正面の根元には木製で赤色の肉髻珠が見える。



⑭首に三道(数本のしわ/段)



⑮垂れた耳朶には環状の穴



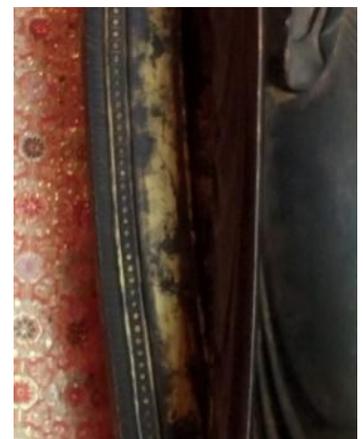
⑯左側面



⑰上品下生(じょうぼんげしょう)の来迎印。
久昌寺の阿弥陀如来立像は右手を上げて左手手のひらを前に向けて、それぞれの手の親指と人差し指で輪を作っている。阿弥陀如来特有の印相で、阿弥陀仏が西方極楽浄土から臨終の人を迎えに来るときの印相(来迎印)。



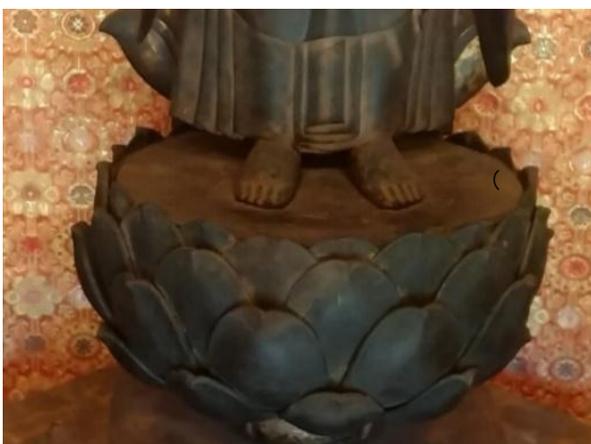
⑱右手



⑲光背に残る金箔

造られた当時は漆の上に金箔が押されていたが、現在では金箔の多くは失われ、光背(こうはい)などに残っているのが確認できるのみである(写真⑲)。

仏像は蓮華座(れんげざ)に乗っている(写真⑳㉑)。



⑳蓮華座に乗る。下半身に1枚の布を巻きスカートのように巻き付けて着る(裙(くん)という)。



㉑蓮華座:上から順に蓮(華)台(内部:蓮肉(れんにく)、周り:蓮弁)、敷茄子(しきなす)、受座(うけざ)、反花(かえりばな)、上框(うわかまち)、下框(したかまち)

現在、保存状態は良好である(資料8)。後補(こうほ、後世の補修)がいくつかの箇所にあるので、仏像は鎌倉時代のままではない。後補箇所(資料8による): 螺髪中前面1段目2個、左耳朶、右耳朶一部、両手首先、両足先、肉髻珠、白毫、着衣部表面の古色塗り、光背、敷茄子(しきなす)より下など。(敷茄子は蓮(華)台の下の鼓型の台。)

胸板の裏に以下の銘文(写真②)が墨書されている。

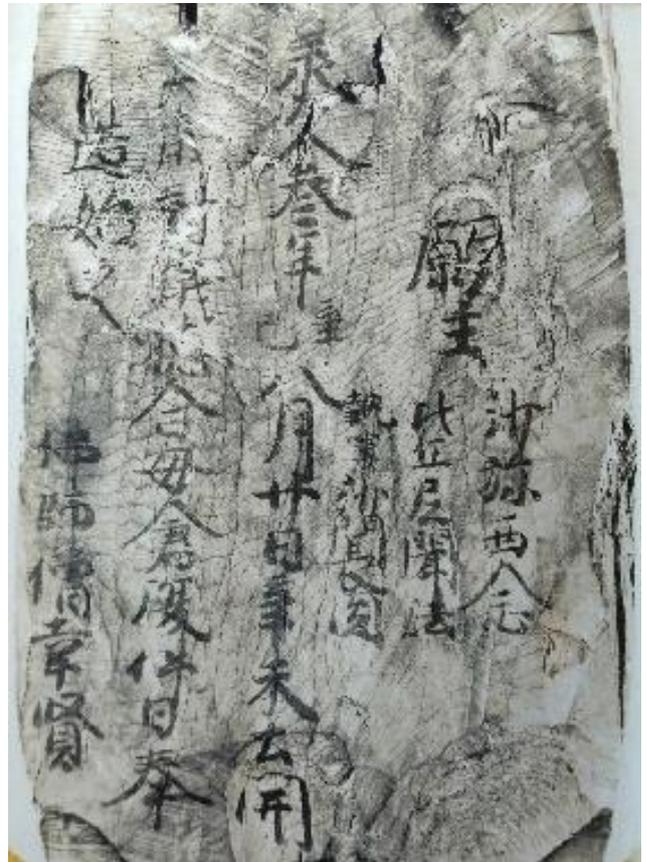
「願主／沙弥西念／比丘尼聞法／執筆沙門長圓／
承久(じょうきゅう)参年(1221年)辛巳八月廿日
辛未土開大歳對歳徳合母倉復件日奉／造始之／
佛師僧幸賢」 (注: 土→資料8では、玄)

墨書によると、沙弥(しゃみ、出家したばかりの僧)西念、比丘尼(びくに、尼僧、比丘は沙門と同義)聞法、執筆沙門(しゃもん、出家した修行者、僧侶)長圓(長円、参考②)の3名が願主(がんしゅ)となって、仏師で僧でもある幸賢が制作したことがわかる。(平安時代になると、仏師の多くは僧籍に入るようになった。)
「執筆」は書記役である人を用いる。願主の筆頭にある西念は平知盛の子孫であろうか? 仏師の幸賢については後述する。

また、墨書から仏像が造られ始めたのは承久3年(1221年)8月20日(旧暦)であることがわかる。承久参年の後の「辛巳」は六十干支(ろくじっかんし、参考②)による年の干支(カンシ、えと)で、1221年は「辛巳」(シンシ、かのとみ)の年であった。八月廿日の後の「辛未」は日の干支で、1221年8月20日(旧暦)は「辛未」(シンビ、かのとひつじ、陰陽五行説では吉)の日であった。1221年は壇ノ浦の戦い(1185年)から36年後、久昌寺の創建(伝1190年)から31年後である。

「土開」以下から「倉復」までの語句については、最近まで意味不明とされていたが、伊勢郷土会の石井昭郎氏が『伊勢郷土史草』の論文「知盛山久昌寺と木造阿弥陀如来立像の体内墨書銘について」(資料10)で詳しく考察している。これによると、「土開」以下から「倉復」までの語句は、具注暦(ぐちゅうれき)によって「件日」(くだんのひ、前に述べた日)である8月20日が最適の制作日で、この日を選定して仏像を作り始めたと、結論づけている。具注暦は日の吉凶を示す暦注(れきちゅう、暦に付された日の吉凶などを示す注釈)を記載した暦で、すべて漢字で書かれている。具注暦は当初は朝廷をはじめ、上流貴族や地方の役所などに配られた。資料10は「土」を五行説(参考②)によるもの、「開」は十二直(じゅうにちよく)によるもの(参考②)と説明している。他の漢字も含めて、詳しくは資料10を参照されたい。

また、平知盛の位牌(いはい)が残されている。古い位牌の銘文は「久昌寺殿從二位知盛公台靈」とある(写真③)。裏面に、「三月十七日」と刻まれている。残念ながら、年号は記載されていないが、資料1によると、15世紀末頃となっているので、死亡時に作られたものではないとみなされている。



②胸板裏の墨書銘(ぼくしよめい)(写真: 久昌寺提供)



③平知盛の古い位牌

久昌寺木造阿弥陀如来立像の時代と仏師幸賢

1 久昌寺の阿弥陀如来立像は承久3年(1221年)に僧でもある幸賢によって制作が開始された。1221年は日本の歴史上、初めて朝廷と武家政権が武力で戦った「承久の乱」が起こった年でもある。承久の乱は貴族政権を支配していた後鳥羽上皇(ごとばじょうこう)と鎌倉幕府執権(しっけん)の北条義時(ほうじょうよしとき)が争い、鎌倉幕府討伐の兵を挙げた後鳥羽上皇が敗れた戦(いくさ)で、武家政権が大きく発展したきっかけになった。2年前の1219年には、鎌倉3代将軍の源実朝(みなもとのさねとも)が2代将軍頼家(よりいえ)の子である公暁(くぎょう)によって鎌倉の鶴岡八幡宮(つるがおかはちまんぐう)で暗殺された。源氏は1185年に壇ノ浦の戦いで平家を滅ぼしたが、頼朝・頼家・実朝3代の源氏将軍の支配は34年間で終わった。

このような時代に、平家の落人(おちうど)の里と云われている菖蒲にある久昌寺に阿弥陀如来仏を招請(しょうせい)しようとした人々の日々の生活はどのようなものであったのだろうか？阿弥陀仏による救いを求め、極楽往生への願いが益々大きくなり、阿弥陀仏の造立(ぞうりゅう)に至ったのであろうか？

2 仏師幸賢はどのような仏師であったのか？鎌倉時代の仏師の多くは京都、鎌倉などの仏所(ぶつしょ、仏像を制作する工房)に属していた。慶派(けいは)、円派(えんぱ)、院派(いんぱ)などと呼ばれているいくつかの派が存在していた。ここで、慶派は康慶(運慶の父)・運慶の一門及び系統の仏師の一派である。運慶は東大寺南大門の金剛力士立像などで有名で、鎌倉時代を代表する仏師である。

仏師の幸賢についてはよく知られていないが、幸賢の墨書銘が入った仏像が岩手県花巻市延妙寺(えんみょうじ、浄土真宗)にある。仏像は阿弥陀如来立像で、墨書銘(資料11)によると、造仏は寛元(かんげん)元年(1243年)で鎌倉時代中期。大仏師幸運・幸賢の親子により岩手県江差郡偵岳寺で造立(ぞうりゅう)された。資料11の著者杉本 良氏は、「幸運は、慶派の名乗りに重要な幸(康)と運の両方を有する慶派直系の仏師といえる。子の幸賢も幸の字を受け継いでおり、慶派の中に「幸」系の仏師の流れがあることがわかる」(資料11、p.39)と主張している。

この幸賢と久昌寺の阿弥陀如来立像(1221年)を制作した幸賢は同一人物であろうか？同一人物であると仮定すると、1243年は1221年から22年後であることと、この時父の幸運が存命であったことから、久昌寺の阿弥陀如来立像を制作したときは比較的若い時であったと推測される。杉本氏は論文において、久昌寺の阿弥陀如来立像については言及していない。同名の仏師(参考⑳)は他にも確認できるので、専門家の今後の研究が待たれる。また、他の疑問点もここに挙げておく。

阿弥陀如来立像はどこで造られたか？ どのようにして山深い矢持の久昌寺に伝来したのか？
願主の3名はどのような人物か？……など。

4 久昌寺境内の句碑(くひ)

境内には山口誓子(せいし)(参考㉔)と藤波窓月(そうげつ)(参考㉕)の句碑がある。

「知盛の 谷 水田とし 植田とす」 (山口誓子)
たに みずた うえた

「この寺の ゆかりを告げよ 時鳥」 (藤波窓月)
ほととぎす



㉔山口誓子の句碑



㉕藤波窓月の句碑



㉖山口誓子の句碑

写真⑰の句碑の除幕式のために、山口誓子が久昌寺を訪ねた時、

「鳴きやみし 蛙よ吾も 平家の裔」 (山口誓子) (裔…子孫を意味する)
かえる われ えい

という句を作った(句碑は中瀬誠一氏宅の庭にあり、書は山口誓子による、写真⑳)。

5 覆盆子洞(いちごどう／ふぼんじどう)



⑰龍ヶ峠伝説の解説案内板



⑱覆盆子橋

覆盆子洞は久昌寺から「伊勢古道」(いせこどう、参考⑳)に入り、龍ヶ峠(たつがとうげ)への道の途中で、覆盆子橋を渡る。ここから車で約5分(約800m)、行き止まりになる。さらに山中を沢伝いに左側を約10分歩く。久昌寺から徒歩約1.7km、海拔約300m地点。(地点の地図は『沼木マップ』参照、資料12)

覆盆子洞は平家の落武者が隠れる場所として使ったという伝説(資料4、5、6)がある。源氏の武士たちが平家の落武者を探して、五十鈴川(いすずがわ)を廻って、龍ヶ峠(たつがとうげ)から菖蒲の地に入ろうとしたところを、平家の見張りの者が発見し、部落の人々に危険な状況を伝えた。そして、老人・婦女・子どもを覆盆子洞に入れて、入口を大石で隠した。



平家の豪傑が源氏の武士6名を討ちとったという伝説もある。 ⑳覆盆子洞の解説案内板

この洞窟は鍾乳洞で、今から約200万年前頃の鮮新世(せんしんせい)後期から更新世(こうしんせい)前期頃にかけて、主にチャートや砂岩から成る秩父古生層に介在するレンズ状の石灰岩層などを、地下水が溶食してできたもの(解説案内板・資料6、写真㉑)。

洞窟近くに設置されている解説案内板の洞内地図によると、洞窟は入口が幅0.7m、高さ約1.2mのほぼ長方形で、約120m奥まで進むことができる(資料13)。

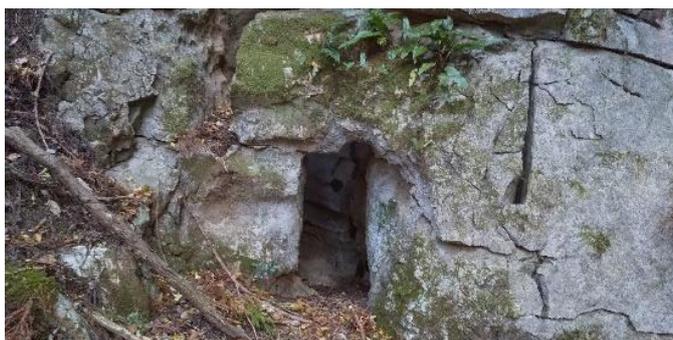


⑳覆盆子洞の案内塔



㉑覆盆子洞の入口(拡大)

「覆盆子洞」は1968年に三重県天然記念物に指定された。



㉒覆盆子洞の入口

「覆盆子(いちご⇒ふぼんじ)」の名称について

昔の文献によると、矢持町、横輪町一帯は覆盆子谷(いちごだに)と記載されている。これがなまって、一宇郷谷(いちうごうだに)となった。(写真⑳の解説案内板による説明)

では、なぜ覆盆子を「いちご」と読むのかは不明である。

6 鷲嶺観音(しゅうれいかんのん)

平知盛が鷲嶺(548m)の山頂近くに鷲嶺観音を祀ったと伝えられている。鷲嶺山頂から100m強の地点にある。この観音は、壇ノ浦に向かって建てられて、敗れた平氏の冥福(めいふく)を祈っていると伝えられている。

7 弓矢八幡宮(ゆみやちまんぐう)跡

(資料14、p.347～350による)「八幡信仰」は宇佐八幡宮(うさはちまんぐう、宇佐神宮ともいう。大分県宇佐市)に始まった信仰である。八幡宮は神格化された応神天皇を祭神(さいじん)とする。源氏とくに清和源氏が氏神(うじがみ)と仰ぐようになり、源頼朝の代には鶴岡八幡宮(つるがおかはちまんぐう)を鎌倉幕府の鎮守(守護する神)とした。武運の神である「弓矢八幡」は武家の間で広く信仰を集めた。

弓矢八幡宮跡(資料15)は矢持町菖蒲の南部にあり、県道横輪南勢線の登り口から登り、標高約300mの八幡山の頂上付近にある(道は整備されていない)。中瀬誠一氏は、平家でも平知盛は宇佐八幡宮と縁が深く、父に倣(なら)って「弓矢八幡」を祀ったと考えている。また、平知盛の時代に平家の落武者を追って来る源氏の武

士たちを見張る岩(とりで)がここにあったと考えている。

最近まで、石段だけが残っていたが、2020年に新たに祠(ほこら)と鳥居が設置された。



③八幡山(はちまんやま)頂上付近



④弓矢八幡宮
(写真③④は久昌寺城山大覚住職提供)

参考

参考①:鷲嶺:外宮(げくう)のほぼ南約7kmに位置し、高さ548m。伊勢市では、朝熊山(あさまやま)に次いで2番目の高さである。

袴腰山(はかまこしやま)とも呼ばれる。鷲嶺は吉川英治の小説『宮本武蔵』で、武蔵が修業した山として有名である。

参考②:菖蒲という名称の由来:菖蒲村は上村(かみむら)と下村(しもむら)の間にあった。なぜ中村(なかむら)でなくて、菖蒲村なのか。鹿児島県の民話(5月節句の昔話、資料16)では、菖蒲の葉は刀に似ているので、鬼には菖蒲の葉が刀に見えるのである。鬼は菖蒲を恐れるので、菖蒲は鬼から身を守る力がある。(以下、中瀬誠一氏による説明)「菖蒲」という名称は「源氏から身を守る」という意味で、縁起が良い。

参考③:末法思想:末法の世になると、成仏を得ることができない時代になるという考え。平安時代中期の1052年から末法に入るとされた。

参考④:浄土信仰:阿弥陀仏の救いによって、死後は仏がいると云われている西方極楽浄土に生まれたいと願う信仰。

阿弥陀信仰:阿弥陀如来を念ずることによって、極楽往生できると説く他力本願(たりきほんがん)の浄土思想。浄土信仰と阿弥陀信仰は同義と考えてよい。

参考⑤:浄土宗:法然が1175年に開いた。末法の世界に住む衆生(しゅじょう)は阿弥陀仏の本願力で救われるとし、「南無阿弥陀仏」と念仏を唱えることで、西方極楽浄土に往生すると説いている。

参考⑥:山号:仏教寺院の名称の前に付ける称号。日本に禅宗が伝えられた以降に広がり、また、寺院の多くが山中に建てられたことにもよる。知盛山は「ちせいざん」と読む。

- 参考⑦: 本堂の観音像:(中瀬誠一氏談)元々は矢持町下村にあった妙光山瑞珠院(ずいしゅういん)に安置されていた。資料10(p.81)によると、明治39年(1906年)に、菖蒲村久昌寺、上村圓通寺、下村瑞珠院の3つの寺は名古屋市の桃巖寺(とうがんじ、曹洞宗)の大和尚によって、1つの寺にまとめられた(合寺)。
- 参考⑧: 従二位: 高位の位階。鎌倉時代から室町時代の武士の最高位は三位であった。中納言: 朝廷組織の最高機関の職の一つ。権: 元は定員外の意味であった。なお、平清盛の官位は従一位であり、太政(だじょう)大臣にまでなった。
- 参考⑨: 逆(さかさ)落とし: 平家物語によると、義経軍は70騎を率いて一の谷の裏手の断崖を駆け下りて、奇襲し、平家軍を破った。この奇襲攻撃は源義経を一躍有名にした。「鶴越(ひよどりごえ)の逆さ落とし」ともいわれる。
- 参考⑩: 安徳天皇(満6歳4か月)と二位尼(にいのあま、母方祖母の平時子)の入水: この際、三種の神器のうち、神璽(しんじ、八尺瓊勾玉(やさかにのまがたま))、神鏡(しんきょう、八咫鏡(やたのががみ))は源氏軍によって確保されたといわれている。天叢雲剣(あめのむらくものつぎ、草薙剣(さなぎのつぎ)ともいう)は失われた。後に朝廷は伊勢神宮から献上された剣を「草薙剣」としている。
- 参考⑪: 乳母子(めのとご): 貴人の養育にあたる乳母(めのと)の子。乳兄弟(ちきょうだい)は実の兄弟より強い絆で結ばれていた。
- 参考⑫: 伊賀平内左衛門家長(いがへいないざえもんいえなが): 伊賀家長、平家長ともいう。平家貞(たいらのいえさだ)の子で、三重県の伊賀を本拠とした。知盛とは乳兄弟であった。
- 参考⑬: 平知盛の入水: 鎧を2枚着て入水したのは、遺体となって、または生きてままで浮かび上がって、晒し者(さらしもの)になることを避けるための心得であるといわれている。
これに着想を得て、能、浄瑠璃、歌舞伎では、知盛は碇(いかり)を担いで入水したとしている。能では「碇潜(いかりかづき)」、浄瑠璃・歌舞伎では「義経千本桜」。能の「碇潜」の最後では、「平知盛(後のち)シテ」は多くの敵(かたき)を薙(なぎ)ぎ払っていたが、今が最期と覚悟を決め、身に鎧二領と兜(かぶと)二枚を着て、更に頭上に碇を戴(いただ)いて海中へ飛んで入ったのである(資料17の解説から引用)。また、歌川国芳(うたがわくによし)などの浮世絵にもこのシーンが描かれている。山口県下関市の「みもすそ川公園」に、関門海峡を背景として碇を担いだ平知盛の像がある。
- 参考⑭: 菩提を弔う: 死者の冥福(めいふく)を祈る。
- 参考⑮: (伝)平知盛の墓は他にもある: 福岡県北九州市門司区の甲宗八幡神社(こうそうはちまんじんじゃ)に平知盛の墓といわれている石塔がある。壇ノ浦の戦いで亡くなった知盛の遺体が門司関(もじのせき)に流れつき、これを憐れんだ里人によって、筆立山(ふでたてやま)の山中に葬られたと伝えられている。後に水害があつて、墓は甲宗八幡神社に移された。(資料18)
- 参考⑯: 寄木造: 木彫で仏像を造るとき、主要部分を2材以上で寄せ合わせて造る技法。頭や体は中を大きく割(く)りぬいた(内割(うちぐり)という)後、元通りに接合する。一木造(いちぼくづくり)に対する語。「内割」によって、表面に起こる干割れ(ひわれ、温度差や乾燥によってできる割れ目)防止、乾燥促進、重量軽減、像の体内に納物・記銘ができる。(資料18、p.98による)飛鳥(あすか)時代から平安時代前半期までは、木造仏の多くは一木造であった。平安時代中期(10世紀後半)になると、寄木造が始められ、11世紀中葉、仏師定朝(じょうちょう)の時代に寄木造の技法が完成したと考えられる。寄木造の技法は多くの仏師が同時に分担して作業を進めることができる大きな利点がある。
- 参考⑰: 通肩(つうけん): (資料19による)インドの仏像の着付けについて、上半身に一番大きい布(大衣(だいえ)、衲衣(のうえ)ともいう)ではおろ方法は両肩をおおう「通肩」と右の肩をむき出しにした「偏袒右肩(へんだ(た)んうけん)の2種類がある。偏袒右肩も通肩も日本の如来像にはとても少なく、日本の如来坐像は偏袒右肩と通肩の中間みみたいな右肩にほんのちよっと着物がかかるかたち、如来立像は右肩を別のもう1枚の布でおおうかたちがほとんどであると記述している。久昌寺の阿弥陀如来立像は三重県の文化財データベース(資料7)では、通肩としている。資料19での第3の方法(如来立像は右肩を別のもう1枚の布でおおうかたち)の可能性はないのかという疑問が残る。
- 参考⑱: 来迎印: 9種類ある(九品(くぼん)来迎印という)。親指と人差し指、中指、薬指のいずれかで輪を作る。
- 参考⑲: 美術院: 「公益財団法人 美術院 国宝修理所」は仏像修理・文化財修理を行う団体。事務所は京都市にある。
- 参考⑳: 長円: 京都の円派(えんぱ)の仏師である長円(? ~1150年、清水寺の別当、興福寺の住職も務めた)とは地位、年代から全くの別人であろう。

参考⑳:六十干支(ろくじっかんし):干支(カンシ、えと)は十干(じっかん)と十二支(じゅうにし)の組み合わせで、最小公倍数の60年周期で循環する。

十干…甲(コウ、きのえ)、乙(オツ、きのと)、丙(ヘイ、ひのえ)、丁(テイ、ひのと)、戊(ボ、つちのえ)、己(キ、つちのと)、庚(コウ、かのえ)、辛(シン、かのと)、壬(ジン、みずのえ)、癸(キ、みずのと)。(音読み、訓読みの順)

十二支…子(シ、ね)、丑(チュウ、うし)、寅(イン、とら)、卯(ボウ、う)、辰(シン、たつ)、巳(シ、み)、午(ゴ、うま)、未(ビ、ひつじ)、申(シン、さる)、酉(ユウ、とり)、戌(ジュツ、いぬ)、亥(ガイ、い)。

資料20によると、承久3年(1221年)8月20日(旧暦)は西暦では1221年9月7日。年の干支は辛巳(シンシ、かのとみ)、月の干支は戊戌(ボジュツ、つちのえいぬ)、日の干支は辛未(シンビ、かのとひつじ)。十二直(じゅうにちよく、暦注の一つで建・除・満・平・定・執・破・危・成・納・開・閉)は開(ひらく)で、道が開ける日を意味し、建築、入学、就職などで吉と云われている。この日の六曜(ろくよう)は先負(せんぶ)。

最近では、2001年も辛巳の年。60年×13回=780年、1221年+780年=2001年。

参考㉑:五行説:中国の古代思想で万物は木・火・土・金・水の5種類の要素から成るとする。陰陽と結びついて、陰陽五行説となった。五行は干支とも結びついた。陰陽五行説では、十干の辛は金の陰、十二支の未は土。

参考㉒:仏師幸賢:幸賢という名の仏師が「木造弥阿上人座像」(みあしょうにんざぞう)(愛知県指定文化財、推定1347年造立(ぞうりゅう))を制作しているが、年代から見て、別人であろう。

参考㉓:山口誓子:1901年～1994年。著名な日本の俳人。山口誓子は昭和44年(1969年)夏に句碑が久昌寺境内に建てられたので、除幕式に久昌寺を訪ね、文章『伊勢行』(資料21)を書いた。山口誓子は伊勢にゆかりが深く、伊勢市の皇大神宮(こうたいじんぐう、内宮とも呼ばれる)近くのおかげ横丁に「山口誓子俳句館」がある。

参考㉔:藤波窓月:本名は藤波清市で和菓子屋「藤屋窓月堂」を営んだ。伊勢市の俳人で、伊勢俳壇「神風館」の十九世の宗匠(そうしょう)でもあった(資料22)。長男は伊勢市出身の衆議院議員で、俳人でもあった藤波孝生(1932年～2007年、俳号は孝堂(こうどう))。「控えめに 生きる幸せ 根深汁(ねぶかじる)」が知られている。孝堂は神風館の二十世の宗匠。

参考㉕:伊勢古道:南伊勢町の五ヶ所から切原峠、床ノ木(いすのき)、上村(かみむら)、菖蒲、龍ヶ峠、高麗広(こうらいびろ)を経て内宮に至る古道のうち、菖蒲・久昌寺―龍ヶ峠―高麗広―内宮・宇治橋の区間をいう。詳細は資料23「龍ヶ峠と伊勢古道」を参照。(以下、中瀬誠一氏の説明)明治の中頃まで、龍ヶ峠は五ヶ所から内宮に抜ける交通の要所であった。

参考資料

- 1) 伊勢市教育委員会 解説案内板「久昌寺」、平成29年(2017年)3月設置。久昌寺の前にある。久昌寺は建久元年(1190年)に知盛の創建とあるが、久昌寺檀家総代の中瀬誠一氏は知盛の子孫によって1190年よりもっと後に創建されたと考えている。
- 2) 「知章最期」、『平家物語』、新編 日本古典文学全集、巻第九、p.239、1994年、(小学館)。
- 3) 「内侍所都入(ないしどころのみやこいり)」、『平家物語』、新編 日本古典文学全集、巻第十一、p.389、1994年、(小学館)。内侍所で神鏡(八咫鏡(やたのかがみ))を安置し、ここで内侍が奉仕したことから、神鏡そのものを内侍所と呼ぶようになった。
- 4) 覆盆子村(いちごむら) 中津八兵衛 『中津家由緒書』、寛永11年(1634年)、(久昌寺蔵)。
- 5) 間宮忠夫 『伊勢市の平家むら』、p.1-56、平成17年(2005年)。間宮忠夫は伊勢郷土会会長であった。久昌寺にまつわる資料(写真、図表など)が多く掲載されている。
- 6) 解説案内板「覆盆子洞 伝説」。覆盆子洞の近くに設置。覆盆子洞は三重県の天然記念物に指定されているので、三重県が解説案内板を設置したと考えられる。
- 7) 「木造阿弥陀如来立像」、文化財データベース、重要文化財、(三重県)、<https://www.bunka.pref.mie.lg.jp>、(参照2023-09-25)
- 8) 「木造阿弥陀如来立像」、『伊勢市史』、第7巻 文化財編、第2章 仏像、p.167、平成19年(2007年)、(伊勢市)。
- 9) 「阿弥陀如来立像」、『三重県史』、別編、美術工芸(解説編)、第1章 彫刻、p.58-59、平成26年(2014年)、(三重県)。執筆者:瀧川和也。
- 10) 石井昭郎 「知盛山久昌寺と木造阿弥陀如来立像の体内墨書銘について」、『伊勢郷土史草』、第44号、p.80-87、平成22年(2010年)9月30日、(伊勢郷土会)

- 11) 杉本 良 「岩手県北上市如意輪寺釈迦三尊像と国見山廃寺—平泉仏教文化の終焉を示す仏像—」、『岩手大学平泉文化研究センター年報』、11、p.27-46、2023年3月30日、(岩手大学平泉文化研究センター)、<https://iwate-u.repo.nii.ac.jp>、(参照2023-11-22)
- 12) 沼木まちづくり協議会 『沼木マップ』、2020年2月、(沼木まちづくり協議会)。
- 13) 「覆盆子洞」、『伊勢市史』、第7巻 文化財編、第10章 史跡・名勝・天然記念物、p.584、平成19年(2007年)、(伊勢市)。
- 14) 真鍋俊照編 『日本仏像事典』、2004年、(吉川弘文館)。
- 15) 中瀬誠一 『弓矢八幡宮縁起』、p.1-4。
- 16) 「鬼と若者」、『まんが日本昔ばなし〜データベース〜』、No0296、<http://nihon.syoukokuai.com>、(参照2023-09-25)
- 17) 梅若六郎 「碓潜(いかりかづき)」、『梅若 謡曲全集』、上巻、p.130、昭和46年(1971年)、(能楽書林)。知盛の最期を描いた修羅物(しゅらもの)の一つ。後(のち)シテの平知盛は霊として演じられる。
- 18) 「平原の合戦と平知盛」、『甲宗八幡神社』、www.kosohachimangu.jp、(参照2023-09-25)
- 19) 山本 勉 『定本 仏像のみみつ』、p.220、2021年、(朝日出版社)。
- 20) 「暦注カレンダー —高精度計算サイト—Keisan、<https://keisan.casio.jp/exec/system>、(参照2023-11-28)
- 21) 山口誓子 『伊勢行』、山口誓子先生句碑縁由、昭和44年(1969年)夏、(知盛山久昌寺)。朝日放送料理手帳より再録。
- 22) 「俳人として」、『藤波孝生オーラルヒストリー』、第1回、p.13～17、2002年10月、(政策研究大学院大学)、<https://core.ac.uk/pdf>、(参照2023-09-25)。インタビューは伊藤 隆ほか。
- 23) 沼木まちづくり協議会 「龍ヶ峠と伊勢古道」、2025年3月、(沼木まちづくり協議会)、<https://numakijin.com>。

謝辞

この解説を書くにあたり、資料などの提供・説明・校正などで久昌寺檀家総代の中瀬誠一氏に大変お世話になりました。深く感謝いたします。

作成責任者: 沼木まちづくり協議会 立花和也
初版 2024年1月20日
改訂版 2025年3月31日

沼木まちづくり協議会

住所: 〒516-1104 三重県伊勢市上野町823 (旧沼木中学校)

TEL: 0596-39-7240

メールアドレス: info@numakijin.com ホームページ: <https://numakijin.com>